

# 一瞬の共同性を生きる

ほしのともゆき  
星野智幸

## 内容理解

この文章で筆者は、自分の居場所が「暴走」を始めたかどうかと問題提起し、それに応じて文学の力を捉え直すとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

### ◇物語の共有・居場所の暴走

物語を共有して、自分を偽らずにいられる居場所を獲得した。自分の居場所が暴走を始め、物語の <sup>1</sup>  が変わり、資格審査を始めた。その結果、誰もが物語に合わせて自分を偽り、資格を証明するため排除に加担することを強いられる。そんな暴走をどう食い止めたらいのか。

〈補足1 排除に加担すること〉所属意識がその人のアイデンティティに深く根をおろし、共同体の物語にその人個人の物語が乗っ取られると、人はその物語に依存するしなく、その <sup>2</sup>  に疑問を挟む者を許せなくなる。

〈補足2 物語の共有〉共同体もアイデンティティも、物語を介して作られる。どちらも言語で作られたフィクションだが、そのフィクションなしでは生きられない。少なくとも <sup>3</sup>  的な生活は送れない。

### ◇一瞬の共同性だけを生きる言語

- ・私たちは、言語で作られた <sup>4</sup>  によって心を形成すると同時に、そのフィクションに縛られながら生きている。だから、文学が存在する。
- ・文学とは、言葉にならないことを言葉だけで表現するメディアである。使いすぎて定型化し空虚になった言語を更新し、新たな意味を発生させる、真剣な遊戯でもある。

## 語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。  
依存（三八一・一）

形式化（三八一・17）

強要（三八二・2）

独善（三八三・3）

・自分と他人の、言語化できない記憶や感情を言葉で物語化し、お互いにその物語を受け止めたとき、初めて<sup>5</sup>  が生まれる。

・個人の物語を作っておきながら、それが固定化しようとすると、自ら壊そうとする。物語が<sup>6</sup>  のものとなつて、権力を持ち始めるのを、阻止する。文学とは、永続する共同性ではなく、<sup>7</sup>  の共同性だけを生きる言語である。

◇他人の中の言葉にならない言葉を書く

・自分の中の言葉にならない言葉を書き、それが言語化できたら、今度は他人の中の言葉にならない言葉を聞く。その言葉の交換が、共同性の喜びを可能にする。

・自分の声だけを聞いて個人の物語を作るとは、<sup>8</sup>  にすぎない。他人のそれを聞いたとき、共同性は<sup>9</sup>  のものとして発動する。それを欠いていると、独善に

陥っていく。自分の物語を聞いてもらえる場を、自分の所有する共同体と勘違いする。

<sup>10</sup>  しないうちに、自分の物語を公のものに変え、世より大きな公の物語の排他性に、加担してしまう。

・文学がさまざまな言葉にならない言葉をどこかで置き去りにして、自分たちの思い描く文学の永続性の中に引きこもるのは、結局、公の物語の暴力に、沈黙することで力を貸すことになる。

要旨

筆者の考えの中で最も大切と思われることを、指定された言葉を使って、百字程度の文章にまとめてみよう。  
〈指定語——言葉・物語・共有〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・日本の近現代小説には、どのような特徴があると言われているか。

・先の大戦時に、文学者を含む日本の芸術家は、どのような活動をしたか。

・文学では、政治はどのように扱われてきたか。

100